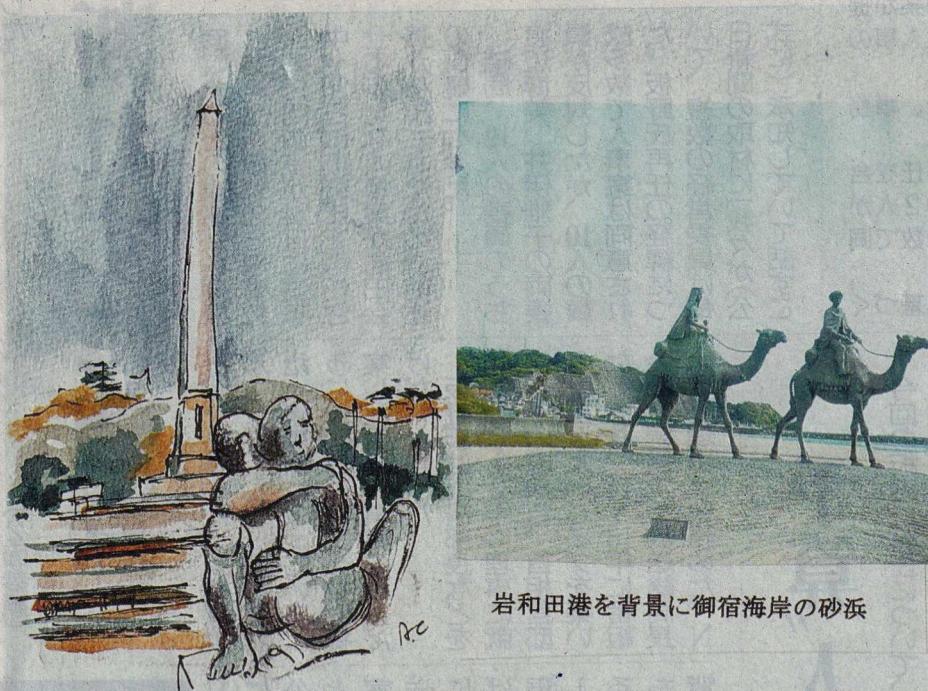


スケッチはメキシコ記念塔



岩和田港を背景に御宿海岸の砂浜

紀伊・房総

くろしお物語

◇14◇

千葉外房線の御宿駅
裾を二頭のラクダが歩
く「月の沙漠」記念像
に向かうと、左側に小
高い砂丘があり、その
の沙漠が詩人加藤ま

州漁民が漁労した網代
湾と岩和田港を通って
メキシコ記念公園に登
った。記念碑に次の説

明があった。

ベーラコスが任期を終
えて、マニラからメキ
シコに帰還する途中暴
風に遭い、乗船してい
たサンフランシスコ号

(スペイン船)は岩和
田海岸沖で座礁した。
駆けつけた岩和田の村
民たちは乗組員たちを
村の大富寺に滞在させ

発見。大富寺に全員收
容させた。寒さと空腹
を満たすため婦人たち
ちは、綿入れの着物や
米、ナス、大根、魚を

過、裸同然の遭難者を
遭難のあった場所は
碑」となった。御宿町
には当時の様子がも
う少し詳しく書かれて
いる。立派な外交で
ある。

「慶長14(1609)碑」
時代は下って、日本
へ友好使節団として派
遣されたオスマン帝国
の軍艦エルトゥールル
号が、700人近くを
乗せて1890(明治
23)年9月16日夜半に
紀州・串本町沖で遭難
した。乗組員373名中31
名の生存者しか得られ
なかつた。明治政府は
軍艦2艘で母国に送り
届けた。以降トルコ大
陸の申本訪問は続いて
いる。近世になつても
ゴはひとり残り、家康
のもてなしを受け、翌
慶長15(1610)年、
シコでは刑務所に収
日本商人22人を同行さ
なく、外国航路として
黒潮の果たす役割も漁
船や漁民を運ぶだけで
ぶ、なくてはならない
他国の歴史と文化を運
ぶ、なくてはならない
外交と情報の通路でも
あった。

救助が結んだ外交

て食糧や衣料を与え、分け与え、救助に懸命。助活動にも関わらず69乗組員373名中31名が救助・保護された。当時の大多喜城主本多出雲守忠朝はロドリゴを大多喜城に招いた。城主の計らいなどもあり、一行は大型帆船で送還された。これが日本とスペイン&メキシコ修好の契機となり、昭和3(1928)年、メキシコ記念塔が建立され、「日・西・墨三国交通発祥記念之